

各関係機関団体の長

殿

各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

技術情報第1号

水稻の種子消毒について

水稻の主要病害であるいもち病やもみ枯細菌病などは、主に本田期に感染した籾が保菌種子となり、翌年の伝染源となります。育苗期の栽培管理が不十分な場合、苗箱の中でこれら保菌種子から病気が蔓延し、ひどい場合は苗いもちや、もみ枯細菌病による苗腐敗を引き起こします。また、見かけが健全な苗であってもこれら病原菌を保菌していれば、本田期における病害発生の原因になります。

このような病原菌の伝染環を絶つためにも、種子消毒や発芽～育苗期間の温度・湿度管理を徹底して下さい。

---

1 作物名 水稻

2 病虫害名 種子伝染性病害（苗いもち、もみ枯細菌病、ばか苗病等）

3 発生地域 県全域

4 防除上注意すべき事項

(1) 種子消毒の効果を高めるために行うこと

- 1) 必ず購入種子を使用し、上記病虫害の多発ほ場や近接ほ場の種子は絶対に使用しない。
- 2) 種籾の塩水選を行う。
- 3) 床土は病原菌に汚染されていない市販の育苗培土を使用することが望ましいが、山土等を使用する場合は床土消毒を行う。
- 4) 育苗箱や播種機等の器具は十分に洗浄した清潔なものを使用し、育苗場所周辺に稲わらや籾殻を放置しない。
- 5) 厚播きにならないよう、適切な播種量（箱当たり乾籾で150g）を守る。
- 6) 出芽～育苗期間が高温・多湿にならないよう、適切な被覆資材を使用し、出芽方法の改善に努める。

## (2) 種子消毒の方法について

1) ①種子浸漬、②種子吹付け、塗沫処理、③種子粉衣、④温湯浸漬処理がある。

温湯浸漬処理以外の方法を用いる場合は、農薬の登録内容と使用方法を必ず確認し、防除対象とする病害に適した薬剤と処理方法を選択する。

種子浸漬では種子消毒後の廃液処理を、決められた手順に従って適切に行う。

2) 温湯浸漬処理方法は農薬を使わない環境にやさしい消毒方法であるが、種籾の温度管理が消毒効果を高める重要なポイントとなるため、処理温度(60℃)、処理時間(10分)、並びに適正な種子量を厳守し、種籾全体が適温になるように努める。

なお、温湯浸漬処理だけではもみ枯細菌病防除に効果が不十分な場合があるため、薬剤処置との併用も行う。

3) 薬剤処置に当たっては、農薬使用基準(使用時期、使用回数等)を順守する。



苗いもち



ばか苗病



もみ枯細菌病による苗腐敗

○病虫害防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

「福岡県病虫害防除所ホームページ」 <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>

福岡県病虫害防除所



最新の病虫害発生状況